

予習用課題

() 年 () 組 () 番 氏名 ()

第4章 日本に暮らす外国人—これまでとこれから— (その3)

1月18日(水)、同じ坂戸市内にある東亜国際外語学院の留学生と交流会を行いました。いま、日本に暮らす外国人は250万人以上(2020年)。大阪市の人口に匹敵する外国人が日本に暮らしています。日本は人口減少社会、ますます外国人が身近な存在になるでしょう。地理の学習の締めくくりとして、技能実習生の現状と、わが国の将来の社会のあり方について考えましょう。

- * この予習用課題は印刷の必要はありません。印刷したものを授業中に配布します。
- * この予習用課題は、事前に回答する必要はありません。授業後、解答してください。
- * 下の教科書等の関連ページは、授業後に一読してください。

(教科書等の関連ページ)

- 教科書 p. 225

- ☒ この予習用課題およびこの課題を前提にした授業は、2022年7月29日に埼玉県高等学校社会科研究会地理部会(高社研地理部会)が実施した「地理夏季巡検」を基にしています。

https://seifu.sakura.ne.jp/chiribukai/#kaki_zyunken_2022



- ☒ 第4章の学習に関する情報は、坂戸西高校・地理Bのホームページに掲載しています。

https://seifu.sakura.ne.jp/324/2022/chiri/#dai_4shou

(坂戸西高校で使用している教材)

帝国書院：新詳地理B

帝国書院：地歴高等地図

帝国書院：図説地理資料 世界の諸地域 NOW 2022

設問 次の記事を読んで、p.4 の問題に答えよう。

「広がる技能実習生ネットワーク 佐賀の老舗靴下メーカーがベトナム人を引きつける理由」
(朝日新聞 GLOBE, 2022.10.22)



飯田清三会長（左から2人目）の誕生日会に集まった実習生ら＝2019年12月、織田一撮影

(1)佐賀県中部の江北町。人口1万人足らずののどかな街に、ベトナム人実習生を受け入れる中小企業がある。老舗靴下メーカーの「イイダ靴下」。若い日本人が集まらないのに困った飯田清三会長（80）が20年前、受け入れを決めた。(2)コロナ禍の時期を除いて毎年10人前後を迎えている。ほとんどが20代、30代の女性で「卒業生」が姉妹や親類、友人らに同社を紹介し、バトンが引き継がれている。同窓ネットワークの中心にいるのが、堀田グエン・ティ・トゥイさん（32）だ。



工場で働く堀田グエン・ティ・トゥイさん＝2020年10月、織田一撮影

農村で生まれ育ったトゥイさんは、ハノイの大学に進んだとき、イイダ靴下で実習を経験した幼なじみから、同社を薦められた。授業に物足りなさを感じたこともあって、大学を中退。2011年に入社した。実習期間を終える3年目に社員と交際を始めた。2014年2月にいったん帰国。同年9月に結婚し、3カ月後に再来日した。4年前に長男が誕生。いまは夫婦で同社に勤めている。日本語が堪能で、飯田の右腕として実習生の採用をサポートしている。

実習生の住まいは敷地内にある寮で、生活費を抑えられる。だから、(3)日本に来るために背負った多額の借金を返し、さらに200万～300万円がたまる。トゥイさんは寮に顔を出しては後輩の悩みを聞いたり、ショッピングに連れて行ったり。帰国した卒業生からの「日本に戻るにはどうすれば？」といった相談にも乗る。地域住民との交流にも気を配る。イイダ靴下でトゥイさんの2期先輩のチャン・ティ・トゥー・ハーさん(32)は帰国後、ベトナム人と結婚した。だが、日本で再び働きたい気持ちがあり、トゥイさんの知り合いがいる福岡県の短大に留学した。短大卒業後、実習生の受け入れ窓口である監理団体の職員になった。両親に預けていた娘を呼び寄せて福岡県で暮らす。「娘はベトナム語はべらべら」とほおを緩める。

8月21日、トゥイさんの3期後輩で同じ村出身のルオン・ティ・フォン・ガットさんが会社員の大石涼平さんと飯田会長を訪ねてきた。結婚報告だった。ガットさんも実習を終えた2017年に帰国したが、「安全な日本に住みたい」と留学生として再来日した。ハーさんが通った短大に在籍中で、大石さんとはバイト先の宿泊施設で知り合った。大石さんは、儉約家のガットから『無駄遣いするな』と怒られる」と笑う。2人とも日本で飲食店を営むのが目標だ。



飯田清三会長（右から3人目）に結婚報告に来た元実習生のルオン・ティ・フォン・ガットさん（右から2人目）と大石涼平さん（右端）。飯田から左に元実習生のチャン・ティ・トゥー・ハーさん、ハーさんの姉で元実習生のチャン・ティ・タン・ゾンさん、堀田ゲン・ティ・トゥイさん=2022年8月、織田一撮影

飯田会長は、途上国への技術移転をうたう技能実習制度の「看板倒れ」を指摘し、「正面から労働者として受け入れるべきだ」「実習生にも転職を認めるべきだ」と制度見直しの必要性を強調してきた。同時に、帰国後のことを考え、日本語教育に力を入れる。日本語教師や、日系企業の社員なら高給を期待できるからだ。一方で、日本にいる間にできるだけ「日本」に触れてもらいたいと、社員旅行で各地に連れて行く。一昨年には夫婦の実習生向けの寮をつくった。長屋型の6戸で野菜作りができるよう小さな庭付きにした。「会社は実習生に支えられている」という飯田会長は安定した生活環境作りに余念がない。それが評判を呼び、希望者が後を絶たない。この20年で、のべ208人を受け入れた。

黙って姿を消したのは 3 人で、この 15 年以上はゼロだ。ベトナム人コミュニティーが日本社会でゆっくと広がり、溶け込んでいる。(織田一・朝日新聞機動特派員)

(問題)

問1 下線部(1)に関して、イイダ靴下は国際貢献の目的から技能実習生を受け入れたのでしょうか。そうでなければ、理由は何でしょうか。

問2 下線部(2)に関して、イイダ靴下にベトナム人実習生が次々にやってくるはなぜでしょうか。

問3 下線部(3)に関して、技能実習生が母国で多額の借金を背負うのはなぜでしょうか。

問4 外国人とともに生きる上で、私たちにとってどんなことが大切でしょうか。